

日本語教育実践研究 (1)

—「地域と日本語教育」をめぐる考察と実践—

池上 摩希子

2006年度春学期に開講した日本語教育実践研究(1)は、「地域」と「日本語教育」、このふたつのキーワードをめぐる、自ら考え自ら実践を組み立てていくクラスです。日本語学習者の多様化から、支援者や学習の場の多様化が言われていますが、実際にそうした多様さに直面したとき、「日本語教育」はどのように展開していけるのでしょうか。実践研究(1)ではまず、「大学の教室を使用して、大学近辺に在住する日本語を学びたい人たちを対象に日本語教室を開き、運営する」ことから始めました。教室は『にほんご わせだの森』と名づけられ、毎週土曜の午後に全10回の活動が続けられました。第一期にあたる今期の受講生は7名、5つのグループに分かれて実践を行いましたが、それぞれ話し合いを重ねながら

- ・教室のデザイン…目標設定、物理的な環境作り、学習者集め
- ・教室の運営…毎回の授業の目標設定、学習活動の決定と実施
- ・地域の教室から見える諸問題の把握と考察
- ・諸問題と「日本語教育」との関連についての考察

を進めていきました。

地域で行われる実践は様々な課題を内包し、それらを実感すればするほど、「日本語教育」の意味と目的について再考を促されます。極言すれば、実感しないことには、考えることすら虚しい作業に終わることでしょう。今回ここに集録される論考は、それぞれに不十分な点が少なくないのですが、教室立ち上げ期の困難を乗り越え、実感から考察に果敢に挑戦した論考です。実践研究(1)を修了した後も、受講生たちがそれぞれに実践研究を進めていくための第一歩となることを希望しています。

『わせだの森』という小さな学習コミュニティを運営していくために、受講生たちは授業外にも多くの時間を割いて、話し合ったり教材を準備したり、また、地域に出かけて行って「ちらし」を配布したりしました。こうした努力がもとになって、自ら考え自ら実践を組み立てていく実践研究(1)の理念が具現化し、『森』において、学習者も受講生も共に様々な学びに出会えたということを申し添えておきます。

(イケガミ マキコ・日本語教育研究科助教授)